

サンプル

①トラウマ・フラッシュバック

夕食を終えて、のんびりとテレビを観ていたときだった。時計が二十一時を回って番組が変わる。いきなり流れてきた子供への虐待のシーン。ドラマだった。

一瞬、何が起きたのか分からなかった。

「っ、っ、ううっ、うっ」

「皐月！」

突然皐月が頭を抱え、蹲ったのだ。クッションで丸めていた身体が更に小さくなり、苦しそうに呻いている。

「皐月！」

体調不良はなかった。

怯えている、とすぐに分かった。

表情を見ようと腕を退けようとするが、皐月の力が強く引き離せない。これほどの力があったのか、と思う反面それほど恐怖しているのだと知る。

「皐月、大丈夫、皐月」

抱えるようにすれば隙間から頬が見えた。濡れていた。涙だった。

②爪切り

「わんわんっ！」

「っわ、皐月っ！」

皐月が突然襲い掛かってきた。どん、と後ろに倒れ込んだが、皐月は気にせず大型犬よろしく乗りかかっただけ。そして顔を舐めてくる。

「皐月っ、ぶわっ、皐月っ！」

一体どうしたのだろう。やけに気分がいいらしい。顔はにこにこ嬉しそうだ。

「どうした、いいことがあったのか」

「わんっ！」

皐月は本当に話すことをしない。そのせいで何が嬉しかったのかは全く分からないけれど、皐月が嬉しそうだとただでこちらまで嬉しくなる。

「どうしたのかな。何かいいことがあった？」

そう問いかけても、皐月はただ嬉しそうに顔を舐めてくる。可愛い。喜びの表現の仕方が皐月は本当に可愛らしい。

「はは、くすぐりたいよ」

そう言っても、こちらも嬉しいので止めたりはしない。満足するまで舐めさせてやる。

「わんっ！ わんっ！」

顔を舐める皐月の頭を撫でながら皐月の興奮が落ち着くのを待つ。しばらくすると、皐月が身体の上か

ら降りた。

「臯月、俺にも嬉しかったことを教えてほしいな」

そう言うとお臯月は目の前でお座りをした。一体何なのだろう。そのとき聞こえたテレビの音。

『お手もおかわりも覚えなくて……』

『何ならできるんですか』

『お座りだけなんです』

ああ、きつと自分でテレビをつけたのだろう。そういえば今日のこの時間は動物番組がやっていた気がする。臯月は動物番組を観るのが好きだ。特に犬特集。仲間だと思っているのか、それとも自分の方が賢いのだと優越感に浸りたいのかは分からないけれど、とにかく楽しそうに観ている。

### ③臯月の宝物

『今日ご紹介するのはこちらです！』

朝食後に観ていたニュースの途中で、新しくオープンするケーキ屋の宣伝のコーナーがあった。美味しそうなケーキがショーケースに並んでいる。

チーズケーキも美味しそう。果物たっぷりのやつも。モンブランも美味しそうだし、ショーケースの上に乗っているクッキーも美味しそうだ。

「わうわう……」

涎が垂れそうになり、じゅるる、と吸う。けれど少し顎に垂れてしまった。しかし拭える服は着ていない。周りを見る。クッションで涎は拭きたくない。きよろきよろして、結局折坂の服で拭くことに決めた。

「わう」

ソファに座る篠崎の足に前足を乗せて顔を服に近付ける。

「ころ」

すぐにバレてしまった。どうしてこう折坂はいつも察しがいいのだろうか。

「涎、すごいな。食べたいのか」

「わう」

折坂がティッシュで顎と口を拭ってくれる。これで痒くない。すっきり。

「臯月はケーキが好きなのかな」

ああ、折坂はそんなことも知らないのか——いや、そう言えば折坂とまともに話した回数はそれほど多くない。一緒にいる時間は長いけれど、犬としてほとんど喋ることなく生活をしているので、確かに好みを知られる機会はなかったかもしれない。そして同時に、折坂の好みも実はよく分かっている。

「わん！」

「そうだったのか。悪かった」

折坂が頭を撫でてくれる。嬉しい。お札に顔をペるペると舐める。

「つぷ、さつつ、さつきつ」

折坂の手が肩を押し返した。寂しい。悲しい。拒否されてしまった。

しょぼん、と床に伏せると折坂の手が背中を撫でた。「おいで」と言われなかったことがまた更に寂しく

てとぼとぼと歩いてクッションに丸まる。

「臯月、悪かったよ。でももう行かないといけないんだ」

行くつて、どこに行くのだろう。折坂を見ると、困った顔をされた。

「……忘れてたのか。今日は打ち合わせなんだ。昼には帰るよ」

「……わん」

仕事なら仕方ない。余所の犬に比べれば、普段家に居てくれる折坂はとていいご主人様だろう。たまに外に出るくらい快く見送ってやらないと。

#### ④お腹が痛い

「わうう……」

「どうした？」

お腹が痛い。お腹がぐるぐるしている。下痢だ。

クッションから降りてよたよたとリビングに向かう。唸ったせいか、折坂も仕事を中断してついてきてくれた。助かる。一人ではカーペットを汚してしまうかもしれないから。

ぎゅるぎゅると鳴るお腹の音はもしかしたら折坂にも聞こえているかもしれない。なんとか辿りついたペットシートの上で蹲る。

「臯月、お腹が痛いのか」

折坂が目の前に膝をついた。

(お腹痛いよ)

甘えたい。お腹が痛いので、と甘えて抱きつきたい。けれど、もう出てしまう。

お尻から尻尾を抜かれると、バババツと汚い音を立てて水のような便が飛び出した。途中ガスも出て、その衝撃に身体がびくりと跳ねる。

「冷えたかな……大丈夫か」

「わうう……」

排便はすぐに止まった。なのに痛みが楽にならない。

「ううう……」

「……もう出ないかな。一度綺麗にしようか」

折坂が優しくお尻を拭いてくれる。リビングは便の匂いでひどいものだ。けれど嫌な顔一つせず、折坂はペットシートを丸めてゴミ袋に入れた。

「さあ、シャワーで綺麗にしような」

折坂は身体を抱え上げてくれた。そして浴室に運ばれる。身体を清めている間にお風呂にお湯が溜められ——溜め終わる前に洗い終わったので浴槽の中でお湯が溜まるのを待った。

「吐き気はないかな」

「わん……」

湯船に浸かるとき、いつもなら折坂が抱っこをしてくるのに。自分だけで浴槽に入っているのが不安で、心細くて、つい出ようとしてしまう。折坂は決してそんなことをしないと分かっているのに、それでも子供の頃浴槽に頭を沈められた記憶は消えなかった。

## ⑤大好きだよ

「ほら皐月、ボール遊びをしよう」

折坂がボールを投げる。けれど皐月は動かない。

「皐月？」

どうしたのだろうかとうと皐月を見る。皐月は折坂をじっと見ていた。その目はひどく冷たい。

「皐月……？」

「……あなたが投げたんですからご自分で取ってきてください」

ひどく冷たい声だった。怒っているという様子ではない。

「新しい飼い主のところに行きます。お世話になりました」

頭の中が真っ白になった。どうしてそんなことを言うのか。一体何をしてしまったのか。昨日までは、今朝までは普段通りの甘えたで可愛い犬だったのに。一体何が皐月の気分を害してしまったのだろう。それとも前々から考えていたことなのか。

「やっ……」

思わず呼びそうになった。けれど縫っているのか、いやだめだ、と自問自答する。皐月はもう決めたのだ。それなら後腐れないように――

ペロ、と頬を舐められた。

「皐月？」

皐月は何も言わずペロペロと頬を舐めている。涙だ、と気付く。泣いているのだ。自分は。皐月に捨てられるのだと理解して涙を――そしてその涙を流させた張本人が舐め取っている。なぜか。同情だった。

これから新しい主人の元で幸せに生活する予定の皐月と、皐月との思い出が詰まったこの家で一人で生きていく折坂。皐月はきっと折坂を不憫に思っているのだろう。だから涙を舐めている。

でもそれなら出て行かなければいい。このままこの家で今までと同じように二人きりで楽しく――楽しくなかったから皐月は出て行くのだ。皐月はこの家を出て行く――

約2万7千文字です。

宜しくお願い致します。